



TITLE:

無神論と国家－コジエーヴの政治  
哲学について－(Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

坂井, 礼文

---

CITATION:

坂井, 礼文. 無神論と国家－コジエーヴの政治哲学について－. 京都大学  
, 2015, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2015-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19077>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

( 続紙 1 )

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	坂井 礼文
論文題目	無神論と国家 ―コジエーヴの政治哲学について―		
(論文内容の要旨)			
<p>本学位申請論文は、ロシアに生まれフランスで活躍し、精神分析家ジャック・ラカンや文学者・思想家ジョルジュ・バタイユなどに大きな影響を与えたアレクサンドル・コジエーヴの政治哲学を解明すべく、彼の無神論及び国家論について考察したものである。「無神論と国家」の題目の下で著者が試みるのは、いわゆる政教分離の原則に典型的に見られるような宗教と国家の関係性ではなく、哲学と政治の関係、さらには哲学者と政治的事象との関わりについてのコジエーヴの思想を問い直すことである。全体は第一部に第一章、第二章、第二部に第三章、第四章を配した形で構成されている。以下、各章の内容を概説する。</p> <p>第一部では、コジエーヴの思想を無神論の観点から読み解いている。第一章では、コジエーヴとレオ・シュトラウスの論争の内容を理解するうえで重要な意義を持つと思われる、コジエーヴの『ユリアヌス帝とその著述技法』を中心に扱う。シュトラウスによれば、従来は口頭による伝承の形で自らの思考を伝えていた古代の著述家たちは、迫害を逃れるべく、あえて本心を包み隠しながら書こうとする傾向があった。したがって、現在の読者たちは古代の著作を読み解く際に、行間を読みながら、注意深く著者の真意を探る必要があるとシュトラウスは言う。コジエーヴはこの発見を大胆に解釈することで、通説では異教徒と考えられてきたユリアヌス帝が実は無神論者であったことを証明しようとしたが、このことの意義を本章は解明しようとする。</p> <p>第二章第一節では、コジエーヴによるパルメニデス及びプラトン哲学の解釈を取り扱っている。あまり知られていないことではあるが、ヘーゲル主義者として名高いコジエーヴは、そのいくつかの著書の中でプラトンの解釈を行っていた。この節では、コジエーヴの無神論的立場を考慮に入れながら、彼がいかに関プラトンを解釈したか考察する。無神論者であるコジエーヴは概念と永遠性との関連に着目することにより、プラトン哲学の批判を試みていた。ただし、コジエーヴはイデア界の存在を否定していたが、それでもやはり哲学は現象の背後にある真理を目指さなくてはならず、また哲学を通じてのみ、かかる真理へと到達することが可能であると考えていた。</p> <p>続いて、第二章第二節では、コジエーヴのヘーゲル哲学理解について論考し、ヘーゲル主義的な三位一体論が、コジエーヴの描いた無神論的哲学史において、重要な論点になると主張する。コジエーヴの解釈では、ヘーゲル主義的な三位一体論は存在・無・（存在と無の間の）差異によって構成されていた。ヘーゲルーコジエーヴは三位一体論を持ち出すことによって、真理が三位一体論的構造を持つことを主張する。こうしてヘーゲルは最終的に、パルメニデス的一者へと再び到達し、そこに真理を見出すことになる。</p>			

コジューヴが真理とは円環を描いていると考える所以はそこにある。三位一体論とは真理論であり、コジューヴの無神論も真理論へと逢着していると言えるのである。

第二部では、コジューヴの政治的意見を理解するために、その国家論を取り上げ、彼の政治哲学は、現実の世界を生きる哲学者の在り方を考慮に入れることで成り立っているとする。

第三章では、コジューヴとカール・シュミットを対峙させていくことにより、ポスト歴史の時代において、法的なもの及び政治的なものについて、いかに考えることができるかを考察している。1930年代にコジューヴが初めて示した見解では、我々は歴史がすでに終了した後の時代を生きるとされたが、実はシュミットも同時期に同様の認識を抱いていた。歴史終焉の後に、伝統的な国民国家は解体される方向へと向かうと彼らは考えていたことから、今日的な視点から言えば、彼らの議論はグローバリゼーションが孕む法的及び政治的な問題と通底していると申請者は主張する。

最後に第四章では、コジューヴが普遍同質国家の名で探究していた、来たるべき国家がいかなるものであるかを検討している。その際に、シュトラウスやシュミット、あるいはマルセル・モースからの影響に言及しつつ、慎重にコジューヴの議論を追っている。フランスの官僚として働いていたコジューヴは1945年の終戦時に、フランスとスペイン、イタリアの三国がラテン帝国となることを、上司である政府の高官に提唱した。彼の考えた「帝国主義なき帝国」とは、ひとまず暴力性及び宗教性に依拠しない形での連邦であると言えるが、連邦の背景において、核兵器を含んだ軍事力と普遍宗教としてのキリスト教が果たす役割が看過できないこともコジューヴは認める。この点においても、コジューヴの国家論は、無神論を出発点としながらも、キリスト教と深い親和性を持っていると本論文は結論づけている。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文が考察の対象とするのは、アレクサンドル・コジエーヴという20世紀フランスの思想界に多大な影響を与えた人物である。1930年代に行ったヘーゲル講義で有名になった後、第二次世界大戦後はもっぱらフランスの国際政治を裏から支える仕事に携わるといふ、一見したところ大きな方向転換を人生の途中で行ったため、彼の思想についての一貫した研究は、日本は言うまでもなくフランスでもまだあまり存在していない。本論文の第一の特徴は、そうした困難に正面から向き合い、コジエーヴにおける無神論と国家という主題を設定し、その考察を意欲的に行ったことである。

本論文の第二の特徴は、レオ・シュトラウスとカール・シュミットという20世紀の政治哲学においてきわめて重要な位置を占める二人の人物の思想とコジエーヴの思想との相違を、相互の見解の照合を中心に実証的な調査も交えながら、明確にしようとした点である。三者三様に独特の思想的立場を持つ人物たちであるゆえ、単なる比較がなかなか成立しにくいことをかんがみれば、目標が完全に果たされているとは言えないにしても、十分に評価すべき試みであった。

さらに第三の特徴も挙げておきたい。申請者はコジエーヴの思想の内実に迫るため、フランスに今も住む彼の親族へのインタビューを行い、そこからこれまで知られていなかったこの晦渋な思想家の日常的な側面にも光を当てたことである。もちろんそのことは、単なる好事家的興味からではなく、コジエーヴの政治思想や政治的立場についての証言を得るために行われており、その成果は高く評価すべきものである。

以下、本論文の内容のうち、とりわけ重要な点を指摘しておきたい。

本論文には「無神論と国家」という一見したところ挑発的な題目が付されているが、あくまでコジエーヴの無神論的立場と政治哲学に通底する思想について一貫して論じられている。コジエーヴは確かに無神論者と自ら宣言しているが、無神論者であるがゆえにかえって、キリスト教の教義について冷静かつ客観的な眼差しを向けていた。つまり、コジエーヴの無神論には、ニーチェの無神論に見られるような反キリスト教的性格はほとんどなく、キリスト教及び教会を攻撃することは彼の意図するところではなかった。それどころか、彼の無神論は、三位一体論というキリスト教の正統教義を内包しており、また否定する主体としての神一人に重きを置く、キリスト教的発想に基づいた人間学にも通ずるところを持つとする。コジエーヴを通して、無神論という観念についての独創的な解釈を提示していると言えるだろう。

一方、このような無神論的思考に基づきながら、コジエーヴはアリストテレス的第三項と三位一体論を結び付けることによって、未来における普遍同質国家の存在形態を模索した。彼は、キリスト教の教会が目指した同質国家と、アリストテレスの教え子であるアレクサンドロス大王が目指した普遍国家を組み合わせながら、そこから宗教的及び攻撃的性質を排除しつつ、新たな国家の理念を作り上げると共にそれを実現

しようと実際に試みていた。またこの普遍同質国家については、シュミットの有名な「ノモス」という概念がコジェーヴに与えた影響を指摘している点も興味深い。シュミットはこのギリシア語に「取得、分配、生産」という三つの契機が含まれていると主張したが、コジェーヴはそれをモース由来の「贈与」という概念で置き換え、19世紀以来ヨーロッパが実践してきた略奪型植民地主義を乗り越えるための可能性の条件としているのである。コジェーヴの国家論が持つ複雑な性質を解明しつつ、またその現代性をも示唆している点を評価したい。

さて最後に、本論文において不十分であった点についても述べておくが、これはむしろ申請者の今後の課題として指摘しているつもりである。まずプラトン、ヘーゲル、ニーチェについての論考が、コジェーヴの関心の独創性と広さゆえにこうした哲学の巨人を扱わざるを得なかったとはいえ、やはり十全な理解に立っての論考になっていないことは残念であった。ニーチェの「超人」、ヘーゲルの「絶対知」などについてさらに研究を進めることを期待する。また論文の随所で現代のヨーロッパ連合やグローバリゼーションについて言及されているが、あくまで申請者の感想の水準を出ておらず、そうした問題についてもさらなる研究を進めることを期待する。

はじめにも述べた通り、コジェーヴの哲学史家としての側面と政治哲学者としての二つの側面を横断するような研究はこれまで十分になされておらず、その意味で、本論文はコジェーヴ研究に対して新たな展望を切り開いていると言えよう。よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成26年8月1日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行い、また平成27年2月18日に最終審査を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降